

# 八濱徳三郎研究序論

——明治期を中心にして——

室田保夫

はじめに

## 一 思想形成期

- (一) 笠岡—同志社—津山
- (二) 『基督教新聞』と『福音叢誌』の編輯

## 二 牧会事業

- (一) 洛陽教会
- (二) 活田教会

## 三 社会事業への道

- (一) 内務省細民調査
  - (二) 大阪職業紹介所
- 結びにかえて

## はじめに

従来、八濱徳三郎（一八七二—一九五二）という人物については「東の豊原、西の八濱」と並び称されるように、我が国における職業紹介事業の草分け的人物として評価されており、社会事業史の上でも、大阪での職業紹介事業を中心にした、社会事業諸分野の中心的人物であるという説が一般的である。

特に日露戦後から大正期に亘る我が国資本主義の高度な発展と社会政策の貧困に伴う社会問題の顕在化——矛盾に派生する、夥しい失業者の群れと下層貧民——都市スラムの形成という難局に対して、根本的な解決とは言い難いが「慈善的」「一時的」弥縫策であれ、その問題に向けて、彼が果たした役割は極めて大きい。

八濱は当初、牧会事業に身を挺したが、大正元年、大阪職業紹介所の設立に伴い、その主事に就くや、翌年より小河滋次郎指導の下で大阪救済事業研究会を組織し、その事業の一環として『救済研究』の編集に従事する。又、大正三年には天満職業紹介所を設立し、五年には労働紹介所を起し、その常務理事となり、更に翌年には大阪少年ホームを設立し、幹事兼主任となる。そして、同一〇年、職業紹介法の施行に伴い、大阪職業紹介所長に任ぜられるに至り、ここを基盤にして大阪を中心にした幅広い社会事業の諸事業にも手を染めていくのである。この間、『救済研究』（後に『社会事業研究』）等に数多くの論文を発表し、主著『下層社会研究』（大正九年）を上梓する等、社会事業界に多大の業績を残している。かかる点から考えても、豊原又男と共に「職業紹介事業の父」としての評価は妥当性を持つものと言わねばならない。

ところで、八濱徳三郎については、従来、社会事業史の視点より、小倉巽二「八濱徳三郎——職業紹介事業への発

想」(吉田久一他編『人物でつづる近代社会事業の歩み』昭和四六年、全社協、所収)中条明子「八濱徳三郎——その社会事業思想」『聖母女学院短期大学研究紀要』第四輯、昭和五二年)、等があり、又、山野光雄の研究「八濱徳三郎」(同著『福祉社会の開拓者たち』昭和五三年、社会保険広報社、所収)によって、初めて生涯に亘る大凡の事蹟と略歴が明らかにされた。しかし乍ら八濱についてのトータルな人物研究は、未だ今後の課題として我々の前に残されていると言わねばならぬ。

筆者は、かねてより、八濱が一介の牧者として生き乍ら、明治四四年突如として、牧職を抛ち、内務省の細民調査に拘わり、以後大阪職業紹介所に奉職し、社会事業に挺身していく、この牧者から社会事業家という変身に少なからずの疑問とともに興味を抱いてきた。そして、そこには「過去二十余年間幾多の風浪を凌ぎ、幾多の險礁を超えて、而して後今日あるは、一にも二にもナザレのイエスの十字架の御恩寵であります」(「わが半生を語る」といふ昭和七年の回顧の文章に鍵があるように思われたのである。即ち、八濱が社会事業に手を染め、そして粉骨碎身していく裏には、明治期を熱心なキリスト教者として生きたことに、後世の彼を決定づける要因があつたのではないか、であるなら、彼の牧者としての姿を更に探求していかねばならないのではないか、と思われたのである。本小論は、以上のような問題意識にかられ稿を起こしたものである。

本稿は、八濱の全体像への考究は後稿を俟つとして、特に明治期に限定し、大阪職業紹介所主事に至る迄の基礎的な事蹟と彼の拘わつた主な紙誌における論稿の整理を主たる目的としたものである。したがって、個々の論稿についての考察や思想的展開、とり分け、明治期に於いて重要なキリスト教思想や大正以降の八濱等については別稿に譲り、本稿ではふれないことにする。

## 一、思想形成期

(一) 笠岡——同志社——津山

八濱徳三郎には「自伝」の類の著書、或は伝記もなく、筆者の涉獵した限りに於いては昭和七年四月七日発行の『基督教世界』第二五一三号より三回に亘って連載した「わが半生を語る」<sup>(1)</sup>という小論があるのみである。しかし、八濱家には、彼の自筆からなると思われる「年譜」<sup>(2)</sup>が残されており、それらと当時の紙誌等を手掛りにして、彼の辿った足跡をみていくことにしよう。

八濱徳三郎は明治四(一八七一)年、岡山県小田郡笠岡町二五四七番地で、父、里吉、母、亀の次男として生まれている。明治一六年、小学校を中途退学し、福山、岡山等で二年間、其後三年間、大阪で丁稚奉公を経験している。

同二一年(一九歳)の時、農商務省東京西ヶ原養蚕試験場に伝習生として入所し、翌年修了後、長野県上田で養蚕の実地伝習を為し、二四年、笠岡に帰郷し、小田郡養蚕伝習所を開設した。

翌二四年、一二月一日、笠岡組合基督教会で牧師・片桐鱗太郎より洗禮を受けたが、彼が如何なる動機、経緯でもって奉教の道に入ったかは確かめ得ないでいる。

明治二六年、二三歳で同志社神学校別課に入学し、二九年卒業迄、三カ年間、神学館の掃除夫や「図書館員」をしつつ苦学した様子であった。<sup>(3)</sup>その間、長男久吉が徴兵猶予の爲め、三宅家を相続した為め、八濱家の家督を相続することになる。卒業の時、肝心の信仰を失う有様で、真にそれは「九仞の功を一簣に虧く」(「わが半生を語る」)という情況であったと回顧しているが、卒業後は、米国宣教師ホワイトと共に岡山県津山で伝道に従事している。八濱が「信

仰を失ひ」乍らも伝道の事業に就いたといふことは、そこには、あくまでも「求道」の精神が残っていた事は疑い得ない。その頃の彼の状況に就いては明治三〇年三月三〇日の「舞子浜教役者講習会記事」の中で「八濱徳三郎氏は青年伝道師としての決心を語り……」<sup>1)</sup>といふ文が披見できうるのみである。

そして『基督教新聞』第七二〇号（明治三〇年六月四日発行）には、「ホワイト氏の教師として来津せられ居たる八濱徳三郎氏は大に教会の爲めにも尽力せられたりしが、今度勉学の爲め再び同志社へ帰校せらるゝこととなり、後任には桑田氏不日来津せらるる筈なり」と記載されている。この記事を信ずれば、八濱は、明治三年の一二月頃、上京する一年数カ月間、京都で勉学に勤しんだことになる。<sup>5)</sup>この時期、彼の処女論文と思われる「古今占卜考」が『六合雜誌』第二〇八号から二一〇号に連載されており、そして、それは後の編著『迷信の日本』（明治三年）において日の目をみるに至る。因に『六合雜誌』における八濱の論文をまとめておくこと次のようになる。

『六合雜誌』の八濱論文

論 文 名	号 数	発 行 年 月 日
古今占卜考	二〇八一—二一〇	明治三一・四・二五、五・二五、六・二五
古今禁厭考	二二二、二二四、二二五	三三・六・一五、八・一五、九・一五
私生児の其父母との統計的研究	二二三	七・一五
金錢に関する児童の觀念（訳）	二二六	一〇・一五
自殺研究	二二二、二二三	三三・四・一五、五・一五
蓮門教の教祖及其の教理	二二七	九・一五
天理教の教祖及其教理	二二八、二二九	一〇・一五、一一・一五

日本地理と日本宗教  
 古代埃及人の宗教及風俗  
 不良少年感化事業

二四〇、二四一  
 二四五  
 二六五

一一・一五、三四・一・一五  
 三四・五・一五  
 三六・一・一五

(二) 『基督教新聞』と『福音叢誌』の編輯

八濱が東京に出て『基督教新聞』の編輯・事務に従事し始めたのは「同氏は旧臘より勉学の傍ら本紙の編輯事務を担当し居られしが……」<sup>(6)</sup>という記事より、明治三年の一二月頃と思われる。周知のように『基督教新聞』は組合教会系のものであり、当時の編輯責任者は留岡幸助であった。留岡は当時につき「……それこれする間に、八濱徳三郎君が遣つて来てくれ、編輯を助けることゝなつた。八濱君へは多少の御礼はしたが、根が貧乏の新聞であるから、之れもほんの言い訳文であつた」<sup>(7)</sup>と述懐しているが、勉学の為め東上し定職を持たない八濱が、当座を凌ぐ術として、このような編輯事業に携つたと推察される。また、留岡と八濱の以前の交友については定かではないが、同じ同志社の別課神学の卒業生であり、又岡山県人という同郷の誼みが二人にはあつたと考えられる。

そして、同紙における八濱の署名入りの論稿がみられるのは、第七九八号（明治三年二月二日発行）の「早稲田村話」であり、以下、明治三年五月の八二二号まで、ほとんど毎号、八濱は論稿を掲載している。それをまとめると以下のようになる（署名のあるものに限つた）<sup>(8)</sup>。

論 文 名	号 数	発 行 年 月 日
早稲田村話	七九八	明治三一・一二・二
街談巷説 『慈善問題』を読む	七九九	一二・九
基督教文壇の時弊	八〇〇	同
街談巷説	同	一二・一六
つゆ子	同	同
巷談街説	八〇一	一二・二三
歳暮雜感	八〇二	一二・三〇
基督教文学の潮流	同	同
ガルスト師の長逝を悼む	八〇三	三二・一・七
清貧論	八〇四	一・一三
松村介石君を訪ふ	同	同、一・二〇
森田久萬人先生の歌什（白井嶺南と共著）	八〇六	一・二七
慢なるかな漫なるかな我覚現今の思想界	八〇七	二・三
美術教育	同	同
郵便条例の改正と基督教の新聞雜誌	八〇八	二・一〇
ニコライ司教を訪ふ	同	同
目黒慰磨園を訪ふ	八一〇、八一	二・二四、三・三
情死と仏教との関係	八一	三・三
海舟道話(一)	八二二	三・一〇

女性に於ける宗教的感化	八二三	三・一七
内村鑑三君を訪ふ	同	同
衛生園主医岡見女史を訪ふ	八一四	三・二四
日曜学校は児童の発達を害せざるか	八一五	三・三一
リギョール神父を訪ふ	同	同
奥野昌綱翁を訪ふ	八一七、八一八	四・一四、四・二一
無名の信者 河上新太郎君を訪ふ	八一九	四・二八
濃飛育児院を訪ふ(一)	八二一、八二二	五・一二、五・一九

『基督教新聞』第八二三号(明治三三年五月二六日発行)には「生義今般学窓多忙の故を以て基督教新聞編輯の職を辞し候間新聞宛の寄稿通信は凡て本社の方へ御送付被下度願上候、牛込区市ケ谷葉王寺前町七四(一心館)八濱掬泉」とあり、八濱は約半年の間、この新聞の編輯に従事したことになる。

そして、八濱は、明治三二年五月に『基督教新聞』の編輯の職を止め、同年九月頃より『福音叢誌』の編輯に従事するようになるが、時を同じくして、彼の処女作『迷信の日本』(明治三二年一月)を編纂し、警醒社書店より発刊するに至る。<sup>(9)</sup>

この本には、グリーン(D. C. Greene)の序文につづき、八濱の「緒言」があるが、上梓の目的や当時の彼の関心の程を知る為に少しく引用しておこう。

今日の我国は皮相の觀察に依れば、憲章儀文、誠に燦然として礼文綺縟の習、温籍雅容の風、以て泰西諸國に誇るに足るものと雖も、忽ち翻て其の真相を窺視せば、封建武士の氣風、既に瘞れて時俗淫靡に流れ、儒仏仙僧の高談、漸く衰へて迷信惑俗、



滔々として人心を蕩揺せんとするにあらず乎。

而して国民の多くは、這般の現象を夙夜に聞睹するも、既に耳熟し眼慣るるが故に、迷信の迷信たる、惑俗の惑俗たる所以を覺らざる也、是れ余輩が大胆にも、本書に題して『迷信の日本』と呼べる所以。読者、若し本書を繕きて其の終に到らば、余輩が語の敢て不倫ならざる所以を首肯せむ。<sup>(11)</sup>

又、この著書の主題たる「迷信」の研究は森田久万人の示教により、数年来の研究成果であると述べて、上梓した目的を「一は国家の風教に少補あらむことを期し、一は以て比較宗教の緒を啓かむとする」<sup>(12)</sup> ことにあるとしている。八濱は『迷信の日本』を編む事によつて、由来の課題であつた比較宗教研究に一応のピリオドを打ち、次に本格的にキリスト教研究への道を歩むべき礎石としてそれを考えていたと思われる。

『基督教新聞』第八三九号（明治三年九月一五日発行）には「八濱徳三郎氏には村田勤氏の後を承け福音叢誌の記者として専ら編輯に従事せらるべし」という消息が記載されているが、彼が該雑誌に編輯人として明記されるのは、明治三二年一〇月一〇日発行になる第四一号からである。

抑も『福音叢誌』は明治二九年六月、村田勤を編輯人として、「首としてイエスキリストの福音に基づける基督教、即ち天啓の基督教を表明せん事を勉む」という目的で発刊し「世界の精神的及智識的の進歩が、相互国民の思想交換に待つ所あるや、実に絶大なりと謂はざる可からず……欧米国民の中に頭はるゝ斬新にして有益なる思想」を一種のドグマに固執することなく、日本に紹介し、啓発することを主眼として置いていた。<sup>(13)</sup>

例えば、彼が編輯し始めた第四一号の「目次」をみてみよう。

福音叢誌第四一号目次

口 絵

英国会衆  
派之名士  
アレキサンドル、マツケンナル氏肖像

論 説

一個の書籍としての聖書の価値

青年の戦

聖書に就ての所感教則

印度の宗教 (完結)

説 教

宗教とは何ぞ乎

青年の安危

史 伝

アレキサンドル、マツケンナル

雑 録

基督教の涙○説教の準備○愛唱せる聖語

神学博士

アルフレッド、チー、ベリー

神学博士

フレデリック、ダブリウ、フアラア

神学博士

エドワード、ビー、コウ  
エー、エム、フェーヤベルン

ジョン、ケールド博士

エヅラ、エイチ、バイングトン

デビッド、ベートン

このように該雑誌は、全てを外国諸雑誌よりの翻訳文を掲載している。

恐らく、八濱は、四年余この雑誌を編輯(第八七号、明治三六年八月まで)するに当り、かかる世界的視野に立つて福音的基督教の論稿を原文で読解し、翻訳すると同時に、それ以上に多大の学的影响を受けた事は想像に難くない。

ところで、八濱はこの『福音叢誌』の編輯の時期に福沢てる（長野県上伊那郡伊那町）と結婚し（明治三年二月）、翌三三年には長男義和、翌三四年には次男康和が誕生している。<sup>14</sup>又、従前からの『基督教新聞』を引きついで『東京毎週新誌』にも、数多くの論稿を発表している。

『東京毎週新誌』の八濱論文

論 文 名	号 数	発 行 年 月 日
自殺と宗教との関係	八六五	明治三三・三・二三
予言者としてのムーデー(訳)	八八三、八八四	七・二七、八・三
信仰の友としてのムーデーの言説教の秒訣(訳)	八九四	一〇・一二
天理教の天地創造説	八九六	一〇・二六
犯罪者の教育を読む(T・H)	八九七	一一・二
監獄改良(T・H)	九〇二	一二・七
耶蘇の聖面	同	同
天才と年令	九〇六	三四・一・一
下には永遠の腕あり(訳)	九〇九	一・二五
墳墓の彼方の生命(訳)	九一二	二・一五
教役者問題	九一九	四・五
我が靈魂不滅を信するの理由	九四九、九五〇	一一・一、一一・八
教役者の妻(附、婦人伝道師)	九五二	一一・一五
我が基督の神性を信するの理由	九五六	一一・二二
		一二・二〇

天に於ける財貨	九八三	三五・六・二七
名流余瀆(一)、(二)、(三)、(四)	九八七—九九〇	七・二・五、八・一・五
教役者は福音宣伝者他 常に感謝すべし(訳)	九九〇	八・一・五
松村介石氏の『信条と品行』てふ論文を読む(上)、(下)	九九一	八・二・二
遊戯と修養との関係	九九二、九九三	八・二・九、九・五
(遊戯及び玩具に関する心理的研究)(一)、(二)、(三)、(四)	九九三、九九四	九・五、九・一二
教界瑣談(一)、(二)	九九六、九九七	九・二・六、一〇・三
教役者に対する服務規律の必要	九九四、九九五	九・一二、九・一九
死刑廃止論(一)、(二)	九九六	九・二・六
新教各派の大同団結	九九七、九九八	一〇・三、一〇・一〇
	九九八	一〇・一〇

## 二、牧 会 事 業

### (一) 洛 陽 教 会

第一章で述べたように、八濱は明治三一年より三六年にかけ、宗教・キリスト教研究を中心にして、自己を磨き、或は、東京での教役者の会合に出席する等、来るべき牧会事業に踏み出す準備をしていた。<sup>(註)</sup>

そのうちに日露戦争が始まりました。此の国を賭しての戦争の時、私は国民のために生命を捧げる決心をいたしました。そして、当時、組合教会中で一番の貧乏教会をと撰んで、京都の洛陽教会に赴任致しました。「わが半生を語る」

当時、洛陽教会は、初代牧師・溝口貞次郎の辞任に伴い、無牧の状態が続き、同志社教授・日野真澄等が主に来援し、教会を維持していた状況であり、専任の牧師が待たれていました。『基督教新聞』第一〇五一号(明治三六年一〇月一

五日発行)には「当教会専任牧師を失ふて茲に年あり由來教勢振はず兎角萎微之状態にありしも今度愈々東京に在つて永く福音叢誌に健筆を振はれたる八濱徳三郎氏を専任牧師として聘する事となりぬ。当教会に同情を寄せ給ふ愛兒姉と共に感謝に堪へざる処なり。」とあり、又『洛陽教会五十年略史』によれば、八濱が洛陽教会の仮牧師として就任したのは明治三十六年一月三日である。<sup>(16)</sup>そして、同月七日の「歓迎送別会」の様様については、

去七日夜新牧師八濱徳三郎氏、前牧師日野真澄氏の歓迎送別会あり雨天にも係らず來会者七八十名、大沢徳太郎氏の司会、宮内法学士の挨拶、日野八濱両氏の答辞、青木澄十郎氏の祝辞ありて親睦会に移り一同飲を尽して十時散会翌日曜朝は九十名計、夜は六十名計の來会者あり近來に無き盛會なりし由<sup>(17)</sup>と報告されている。

八濱の洛陽教会赴任後、幾ばくも経ない翌三十七年二月、対ロシアとの戦争が勃発する。前掲の回顧「私は国民のために生命を捧げる決心」をしたことは、牧会事業の一環としての「京都奉公十字会」という組織で具現化する。京都では、以前より市内各派の教役者の団体として「連合教役者会」が設けられていた。

日露戦争という事態に即して、二月一九日の会合で「京都奉公十字会」についての議案が可決され、同会は成立した。そして、次のような趣意書を四月に発表し、広く寄附金を募集していくことになった。

京都奉公十字会

日露戦争は振古の大活動なり、東洋の平和と帝国の生存とは一に此拳に繫る、吾人生れて此千載一遇の時に際するもの、豈奮起せざるを得んや、吾人は至愛至仁なる天父の摂理が、我帝国の運命を庇護するを信じて疑はずと雖も、我忠勇なる海陸軍人が身命を捨てて死地に猛進せるを見、翻つて遠征の人を懷ふ彼等が家族を顧る毎に、転た同情の念に堪へず、進んで寸分の誠を尽し、国

民後援の事に当らざるを得ざるなり、思ふに戦争の終局は短日月の間に望むべからず、各方面に於て後援擁護の必要なる固より云ふを待たず、是を以て吾人は主として慎重持久の態度を取り、他の公共諸団体の力の及ばざる方面に於て、基督信徒たる特殊の働に従事せんことを期す、願くは大方同感の諸兄弟吾人の志を諒し、来つて此挙に賛同し賜んことを、

明治三十七年四月

発起人 京都市各基督教会  
同 所属各団体<sup>(18)</sup>

尚、前記の会合で役員決定も為され、会長には牧野虎次が当り、評議員一二名の内、八濱徳三郎の名がみえる。<sup>(19)</sup>この会は其後、三十九年七月、閉会するまで、出征軍人の家族訪問、病院に收容された傷病兵の見舞い、或は戦死者遺族の救恤に対して、多大の役割を果した。

ところで、八濱は洛陽教会に赴任したけれども、未だ按手札を受けていた訳ではない。八濱の按手札式が举行されたのは、明治三十八年四月三日の洛陽教会における京都部会の席上に於てである。『基督教世界』第一〇九五号(明治三十七年八月二五日発行)の記事によれば当日午前一〇時より牧野虎次(部会長)の司会の下、按手札試問会がもたれ、洛陽教会執事・木曾田梶太郎、今村直太郎の「教会現状報告及び希望」のあと八濱が「信仰の告白」を朗読し、部会代表者は満場一致をもって賛成した。そして、その司式は次のような順序でもって举行された。

司 会

第三四番

執事 木曾田 梶太郎君

一 同

一 讚美歌

一 山 田 兵 助君

一 聖書朗読

一 森 山 寅之助君

一 祈 禱

第四百〇六番

一 同

一	教会及牧師の往復書簡朗読		
一	按手祈祷		執事
一	讚美歌(新作)		沢野 鋭五郎君
一	牧師に対する勧め		古木 虎三郎君
一	教会に対する勧め		古木 虎三郎君
一	祝 辞	教会代表	歌 の 組
一	握 手	同	古木 虎三郎君
一	同	来賓総代	牧野 虎次君
一	讚美歌	第四六十二番	西尾 幸太郎君
一	祝 辞		難波 宣太郎君
			ラル子 デ君
			同
			八濱 徳三郎君

かくの如くに八濱は古木寅三郎より按手札を受け、名実ともに洛陽教会牧師として就任し、以前にも劣ることなく、牧会事業に身を献じていく。例えば明治三八年一月二四日から三夜に亘り開催された「聖別会」の様子につき、

二十四日は、「主よ我等に何を為さしめんとし給ふや」との題下に八濱牧師の奨励あり、引き続き熱心なる有志者の感話と祈祷とあり、集会は殆んど二時間に至り百五十名許りの来会者何れも聖靈の活火に接するを感じたりき、翌夜は同牧師「強いて人々を伴ひ来れ」との主意につき、奨励あり九十名許りの来会者いづれも伝道の必要を感じたりき、第三夜は同牧師「協会一致」の題下に人々各その信する所に随ひ修養、伝道に尽力すべきをすすめられ八十名許りの来会者はいづれも覚悟する所あつて散会したりき、<sup>(20)</sup>と報告されており、彼の牧者としての情熱ぶりが察知できよう。そして、八濱自身は洛陽教会時代のように回顧している。

洛陽教会の三年間は私の一生涯に於て最も苦難の時代でありました。薄給のため家を借りることが出来ないの、軒は傾き壁は

壊れ殆ど人の棲まふ事の出来ない会堂裏の番小屋に住み、糟糠僅に其の日を糊するに過ぎない貧乏の上に、平素蒲柳の身の妻は數回瀕死の重症に冒され、二人の幼児は栄養不良のため夭死すると云ふ悲哀痛恨の經驗を嘗めましたけれども、一方には此等の不幸逆境のため愈々信仰は励まされ、夜を日に繼いで伝道に努め、三年間に約四百名の教会員を作りました、其の教会員の間には今現に社会の各方面に活躍して居る立派な人物が少くはありません。(「わが半生を語る」)

八濱はこのように、新天地のもとで、私生活の逆境と闘い、牧会事業に極めて貢献を為した。<sup>(21)</sup>しかし、四条教会との合併問題で洛陽教会を去らねばならないことになる。

明治四一年二月二十九日、臨時総会が開かれ四条教会との合併問題が議論された。これは「市の中央に一大会堂を建設し、全市に向つて統一伝道を行う為<sup>(22)</sup>」という目的で、当初四条教会より案が出されたものであり、洛陽教会側は、これに対し、役員会を開き賛成の議に決したが如上の総会で否決されたのである。八濱はこの合併問題の不成立の責を負つて同年三月教会を辞任することになった。

そして、辞任した後、活田教会に招聘される迄の間、八濱は共励会の雑誌編輯に携つている。共励会は、日本に於いては、明治二六年七月初めて全国大会を神戸教会で開催し、明治三四年五月から、機関誌『共励雜誌』を発刊して<sup>(23)</sup>いた。明治四一年四月の第一六回大会で会長に原田助が推挙され、当時同志社総長であつた原田が京都にいた関係上、その事務所が岡山から京都に移され、丁度、洛陽教会を辞任した八濱が機関誌『活世界』の主筆として着任したものである。『共励会の回顧』によれば、八濱の手になる新装した『活世界』第一巻第一号が出版されたのは同年五月のことである。八濱の編輯方針としては、共励会の報告や個人消息に止めず、論説、説教、神学、聖書研究等「菊判三十頁から四十頁位の堂々たるもの」で、キリスト教界全体に対して企図されたものであつた。しかし、一般のキ



リスト者向きの「修養雑誌」としては可成り成功したが「派手な編輯振り」のために読者の増加にも拘らず財政上の困難が伴い、二年足らずで変更になったという。従ってこれを信ずれば、八濱は、明治四一、二年の間、即ち活田教会牧師時代にかけて、この事業に拘わっていた。<sup>24)</sup>

ところで、八濱はこの洛陽教会の牧師時代にも、主に『基督教世界』に論稿を発表している。

論 文 名	号 数	発 行 年 月 日
祈願の故障	一〇九一、一〇九二	明治三七・七・二八、八・四
信仰の告白	一一四六	三八・八・一七
救を維持する法(一)、(二)、(三)	一一五五—一一五七	一一〇・一九、一〇・二六
播種の比喩	一一六四、一一六五	一一〇・二二
童女の比喩(一)、(二)	一一六七、一一六八	一二・二一、一二・二八
湖畔の漁舟(上)、(下)	一一七〇、一一七一	三九・一・一一、一・一八
開眼の奇蹟(上)、(下)	一一七四、一一七五	二・一、二・八
葡萄園の労働者(上)、(下)	一一七八、一一八〇	三・一、三・八
		三・二九、四・一二

これらは、牧師という職を反映して主に説教をまとめたものであるが、多くは同時代に出版された『基督の比喩』(明治四〇年一二月、警醒社書店)に収載されることになった。<sup>25)</sup>

(二) 活田教会

八濱は明治三六年以来、爾来約六カ年間牧した洛陽教会を辞し、次に「また一番貧しい教会を求めて」(わが半生を

語る。神戸の活田教会に赴任することになる。

活田教会は、明治二六年七月創設された組合系のものであるが、当時の教会につき「小室牧師を明石教会に送りより久しく無牧なりし我教会は夏休み以来女学院教授長坂豊次郎氏の同情により朝夕の説教を同氏に委嘱するに至れり。会衆は三十名内外あり」とあるように同じ神戸にある組合系の神戸教会や多聞教会に比し、小さな教会であり、新牧師が俟たれていた。<sup>(27)</sup>そして、『基督教世界』第一三二六号（明治四二年二月四日発行）において、

当教会は去る十八日八濱徳三郎氏新牧師として来任せられ二十四日日曜の朝は「理想の教会」と題して説教ありたり、理想の教会としては現今の重なる教会が神の宮たる教会を忘れて時に或は興行場と化し學術文芸の批評場とならんとする傾きあるを難じ斯の如きは遂に我理想の教会ならずとも神の宮たる教会につき敬虔慎重の態度を以て説話せらる。会衆六十名夜は「迷へる羊」にて四十余名の聴衆あり、教会は此新牧師により更に新しき経綸を立て、着々活動の緒につきつゝあり。本年秋季には拡張伝道を舉行すべく議決せり。

と記されてある。八濱が活田教会に赴任するのは彼の「年譜」や「わが半生を語る」によれば明治四一年となつてゐるが、引用文中より明治四二年一月一八日に正式に着任したと考えられる。又、同誌第一三二八号（明治四二年二月一八日発行）では「同教会は八濱牧師を迎えて愈積極的活動の着に就かんとし、毎月一回大演説会を催し、又た遠からざる中に拡張伝道を舉行し、大に教勢を拡張する筈なりと云ふ。」とある。即ち、明治四二年度の教会伝道方針として名士を招き「伝道説教」を重視した。因に「本年は方針を変へて専ら箇人伝道に向つて力を尽くしつゝあり」とあるように、翌年は個々人の家庭を歴訪し、地味に伝道をしていく方針をとつてゐる。

ところで、活田教会牧師時代で重要なことは、この時期より社会事業に手を染め始めた事である。その客観的条件としてこの教会の性質が重要な基因に挙げられよう。八濱は活田教会につき次のように述懐してゐる。

この教会は神戸の場末の教会で、会衆の大部分は貧乏人や失業者でありました。貧乏のため夫の他行中に操を売つたといふ婦人さえありました。又、嘗ては大家の主人公であつたものが、事業に失敗して親子三人ボロをきて教会へ来るといふ有様でありました。私は、教会内に難儀苦勞している人々の多いのに胸を打たれざるを得ませんでした。教会に来る人々の中には食ふや食はずの人々が少からずあります。「わが半生を語る」

かかる所謂、社会事業の対象者に向け「水火辞せざるの決心覚悟」を定めて着手したのが「人事相談所」であり、職業紹介の「職業通信社」であり、失業者の爲の「十字屋」という店舗の設置であつた。<sup>29)</sup>これらの事業は明治四二年より開始せられており、丁度、英国で「職業紹介法」(The Labour Exchange Act)が發布されたのと時を同じくしている。

勿論、こうした底辺に喘ぐ人々に対して、八濱がそこに生きる証を求めたのは、彼のキリスト教、即ち牧者として「基督の御旨に適ふ」(「わが半生を語る」)という強い信念と反省から生まれたものである。しかし、理想とする教会「神の宮」に群がる人々に、彼が関われば関わる程、教会事業に携わる者として、厚い壁に屹立せざるを得ないことになつた。

恰度炎天に旅人が木陰を慕ふて集まるように、教会には失業者、前科者、貧乏人などが次第に其の数を増して来ました。彼等は其の勢力を恃んで容易に在来の会員に下りません。遂に両者の間には氷と炭、水と油のやうに感情の疎隔を醸すに至りました。仍で教会の重なる人々は牧師たる私に対して其の短を挙げ、其の醜を発いて攻撃を初めました。反対は教会内からのみでなく、同労の牧師仲間からも起りました。斯くて明治四十三年(一九一〇年)には教会を去らねばならぬ破目に陥りました。

〔わが半生を語る〕

彼が教会を辞任したのは、文中にある明治四三年ではなく四四年四月頃と考えられる。がいずれにしろ、「ヤコブ書第二章」を読み、「無限の感慨に撃たれ」底辺の人々と生きる覚悟をした八濱は「教会からは棄てられ、友人から

も顧みられず……無限の悲憤と悲愁を懐きながら……親子五人は濡れ鼠のやうな姿で」神戸から妻の郷里信州伊那を指して落ちていったのである。「わが半生を語る」

『基督教世界』第一四四五号（明治四四年五月一八日発行）には「八濱徳三郎氏、今回活田教会を辞せられたり、尚氏は留岡幸助氏の社会事業の方面に従事せらるべし」という消息記事が掲載されている。八濱は信州伊那に落ちた後、妻子を残し、畏友留岡を頼り、単身上京することになる。

### 三、社会事業への道

#### (一) 内務省細民調査

八濱徳三郎が上京したのは、明治四四年五月頃と推定される。明治末期の日本は、幸徳事件にも窺えるように、社会運動・労働運動における「冬の時代」を迎えており、とり分け、社会事業や社会政策の貧困を背景として、首都・東京は資本主義社会の矛盾が顕現していた。中でも、鈴木文治が「東京浮浪人生活」<sup>(30)</sup>の中で描破したような都市下層社会の貧民問題は、例えば「浮浪人研究会」<sup>(31)</sup>に窺えるように朝野を問題の俎上に上っていた。

そのうちに内務省で我邦では最初の細民調査を施行する事となりましたので、留岡生江両氏の下に、内務省の囑託として之に従事することになりました。内務省の囑託と云へば立派であります、実は日給一円余で毎日朝から晩までテク／＼歩いて、下谷浅草の貧民調査をするのであります。特に私の担当は、口入屋と質屋と高歩貸の調査で、私に取つては誠に得がたい修業となりました。「わが半生を語る」

抑も、この細民調査は、明治四四年六月より開始されたものであり、当時の内務省の囑託であった留岡より、この調査への糸口があったと推察される<sup>(32)</sup>。そして、調査は「細民戸別調査」(下谷、浅草両区の一部)、「木賃宿調査」(小石川

区の一部)、「細民金融機関(質屋)調査」(下谷区)、「職業紹介所(雇入口入業)調査」(日本橋、浅草両区)、「職士家庭調査」(市内在住の職工)と広汎に亘って行われている。<sup>(34)</sup>翌年三月、これらは「細民調査統計表」として、刊行されることになる。八濱自身も同時代、『人道』第七九号(明治四四年一月五日発行)に「高利貸と貧民状態」という題目で、或は後に『救済研究』や『友愛新報』等でも、「高利貸」や「質屋」の研究について論文を書いており、そして、これらの研究が後の主著『下層社会研究』の骨子になっていったことは周知のとおりである。

八濱は、こうして明治末期の東京の下層社会を自ら額に汗して実地・見聞することになった訳だが、八濱自身も述懐するように「得がたい修行」であったことは確かであろう。

ところで、八濱は職業紹介事業への決心を「我が半生を語る」では、次のように回顧している。その頃の彼は家族を信州に残して来たので、家族の許へ生活費を切りつめ送金せねばならない状態であり、加えて「実家に在る妻は子供等が兄弟の子供等と喧嘩をするから、早く上京させて呉れと、三日にあげず引取方を要求」してくるような切迫した状況にも置かれていた。

恰度その頃、夫が先棒を曳き妻が其の車の後を押しながら坂を登って行く車力を見て

自分は神に献身してゐる者であるのに、何故なすべき仕事と与へられぬのであらうか、何故この日傭稼のやうに、夫婦相扶け相慰めながら生活を営むことが出来ないものであらうか、

事、志と齟齬し空しく失望落胆の境に沈める自分と日傭稼との境涯を比較して、涕泣嗚咽胸を打つて慟哭したのであります。人生の悲哀痛恨の尤なるものは、失業の苦痛より甚だしきはなき所以を染々と痛感し、愈々一身を献げて失業者の為に働かうとの決心を固めたのであります。(「わが半生を語る」)

こうして、失業者の為に己が人生を捧げる決心をした八濱は、その場所を以前、丁稚奉公をして「最も親しみの

ある大阪」に決定することになる。そのことは青木庄蔵らの尽力による大阪での職業紹介所設置経緯と連係して考察していかねばならない。

## (二) 大阪職業紹介所

我が国の職業紹介の歴史をみてみると、従来、「口入屋」「桂庵」等と称せられる営利職業紹介が蔓延し、徒弟、下男等の奉公人の世話、封建的な人夫請負、或は娼妓のような人身売買的な仲介役として存していたが、明治末期にはその弊害がしばしば指摘されるようになった。明治四二年、時の内務省地方局長・床次竹次郎は世界的情勢を鑑み、治安的意図も加えて、東京、大阪に公設職業紹介所の設置を奨励したけれども、実現に至らず、漸く明治四四年一月に東京市内に三カ所設置されたにすぎなかった。このような状況で、失業者問題と深く拘わり乍らも、東京では以前より救世軍の労働紹介所やキリスト教青年会等の民間団体がやっていたにすぎなかった。

大阪に於いても、明治四〇年以来、キリスト教婦人矯風会大阪支部になる「婦人ホーム」や大阪キリスト教青年会が「人事相談部」の名称の下で、小規模乍ら、この種の事業を開始していた。<sup>35</sup> 明治末期の大阪は、失業者が「一万人を超えている」<sup>37</sup> 状況で、東京と同様に都市スラムの問題と極めて重要な拘わりをもっていた。当時、大阪市会議員であった青木庄蔵(天満教会員)は、先の床次の企図したものが実現しないのを遺憾とし、又、かかる状況を「大きな社会問題」と考え、大阪に職業紹介所の設置を懇望し、東上することになった。青木は東京で、原胤昭や、留岡、或は床次らと会見し、彼らの大なる賛成を得、友人である岡島千代造等の協力を得て、実現の運びに至ったのである。

かくて、明治四四年一二月、青木や岡島ら六人の発起人でもって「大阪職業紹介所趣意書」<sup>38</sup>が発表された。その「趣意書」をみると、冒頭に、

当今経済状態の変革は動もすれば中産階級の民をして其産を傾かしめ、細民をして其業を失はしむ、刻下大阪市内に流浪せる失業者浮浪人の数は無慮数千人を下らざるべし、彼等の多くは身体に疾病的故障ありて普通の労働を取ること能はざるが為め、自然に生存競争場裡の落伍者たらざるを得ざる也、彼等は窮乏之余に窃盜罪を犯すか、乞丐の群に身を墮すか、或は自から死を招くか、此三者中の一を扱ばざるべからざるの悲境に陥れるなり、浮浪人の多くは飢餓凍餒の爲めに自暴自棄して犯罪の危険性を有するに至る、是れ実に国家の患の存する処なれば社会政策上特に注意を要する所也、曩に畏くも仁愛に富ませ給ふ、聖上陛下は彼等の窮状に深く御軫念あらせられ、内帑の金一百五十万円を御下賜あり、無告の窮民をして其頼る所あらしめよと宣ひき、苟も臣民たる我等は特に聖旨に畏みて窮民の救恤に尽瘁し、今後聖慮を煩し奉るの機会を絶滅せんことを期せざるべからず。

と、該事業の企図するところを述べ、次に従来の慈善事業が金錢若しきは物品の施与に重きが置かれて、反つて情民を養成している弊害を指摘し、斯業における「勤勞」の重要性を論じている。そして、先進諸国の都市や東京での近時の事業の趨勢をあげ、

我等も同志と共に先づ大阪市内に二箇所模範職業紹介所を創立し、無料を以て諸般の職業及労働を紹介し特に一百名を容るゝに足る寄宿舎を設けて労働者を宿泊せしめ、之を慰撫監督し以て幸福なる生涯を送らしめん事を期す、其主任者として多年細民の研究に従事し、失業者に対して熱き同情を懐ける八濱徳三郎氏を迎ふる事となりたれば、茲に我儕企図する所を世に公にし、広く有志諸彦の賛助を仰がんと欲す、

と、大阪での具体的な計画を開陳し、そこには、八濱への期待が充分にかけられていることが窺える。<sup>39)</sup>

大阪市より南区恵比須町憲兵所跡の家屋を借りて、大阪職業紹介所を設立したのは、明治四五年二月であつた。しかし、事業を開始するには未だ幾多の難関が待ち構えていた。第一に同所が旧今宮村共同の宝庫(御輪旨を奉安した)に隣接していたので「這般の地域に労働者を出入せしむるは皇室に対して不敬なり」という附近住民の反対と、二つには同業者である大阪の口入業者、木賃宿業者からの営業妨害としての反対運動が起こつたことである。<sup>40)</sup>

仍て私は反対派の有力者に今宮戎神社に集まって貰ひ、職業紹介事業並に労働者保護事業の必要に就て一場の演説を致しました

が、遂に感胸慨に充ちて言はんと欲して言ふ能はず、歎歎嗚咽して涙滂沱たるを看て流石の反対者も終に私の願望を叶へて呉れました。(わが半生を語る)

そして、同年六月より、その事業に向けて新しい船出をしているのである。それは、牧者たることを断念し、貧しい人々と共に生きる、という彼なりの強い信仰の帰結、即ち反省と覚悟に裏打たれていたことは言うまでもない。

### 結びにかえて

以上のような経緯でもって、八濱はキリスト教に接した後、宗教・キリスト教研究から牧会事業に身を挺し、社会事業への道に入っていく。そして、畢生の事業とも言うべき大阪での職業紹介事業を中心に、社会事業家として、大正、昭和時代の長きを相渉っていくことになる。

大阪職業紹介所を開設した当時、彼の居室には、次のような「自省」の文が掲げられていたという。

#### 自省

神仏は屢ば鰥、寡、孤、独に身を化へて我等の心術の善、悪、良、否を試験し給ふ、故に世の弱者は神仏の化身也、権現也、予は職業紹介所主事として、日夜彼等に奉仕するの職に在るもの、謹慎沈黙靜に心裏を省みるに、彼等に対して不尊不慈なりし過去の行状、宛ら絵図を展ぶるが如く限定に映じ、彼等が怨嗟の声恰も雷の如く耳恨に徹し、痛恨悲恨、身を容るゝに処なきを覺ふ、諒闇中茲に新春を迎ふるに際し、予が既往の不仁不徳を社会に告白し、左の條々を格守せん事を天地神明に誓ふ。

何等の理由ありと雖も決して怒る勿れ、敵する勿れ、何人にも愛嬌よく決して議論がましき言葉を発する勿れ、諸の人に寛容に諸の人の僕となれ。

大正第一春 八濱徳三郎

このように、自らの過去の生活に対する厳しい「反省」と「覚悟」の上で「髻を剃り、魚帯を結び、縞の羽織を着し



前垂れを下げ<sup>(4)</sup>」た八濱には、かつての牧者としての姿は窺い得ない。しかし、後になっても「若し基督この世に来らんに貧しき者は飢に泣き、悩める者は路に彷徨ひ、幾多の眼には涙溢れ幾多の心は咽び悲めるに、基督は何の違ありてか区々たる教義や、神学の問題を喋々せん耶、基督の最も力を尽すべきものは、社会の罪惡を廓清し、不義を征伐し、以て此世からなる神国を建設する事なるべし<sup>(45)</sup>」と論ずるように、そこには「口入屋の番頭<sup>(46)</sup>」然たる八濱とは別に生涯、イエス・キリストに擬った生き方を求め続けたもう一人の八濱がいるように思われる。

注

- (1) これは昭和七年一月同志社神学館での講演筆記であるが『無宿労働者昭和六年報』(昭和七年七月、大阪労働共励館)にも収載されている。
  - (2) 表紙に「八濱徳三郎年譜」と書かれた草稿であり、生誕より昭和二年(七七歳)まで記されている。以下「年譜」と略す。(奈良市八浜和氏家所蔵)
  - (3) 「年譜」に依れば、「京都同志社神学校ニ入学ス米国伝道会社ノ学資給与ヲ謝絶シ神学館掃除夫並ニ図書館員トシテ参ケ年間苦学ス」とある。因に、明治二九年別科神学卒業生は八濱の外、秋吉辰次郎、樋口貫、松本次夫、三谷公一、大島鐘太郎、高橋正道の六名である。『同志社校友会報』第六号(明治三三年三月二二日発行)。
  - (4) 『基督教新聞』第七二二号(明治三〇年四月九日発行)。
  - (5) 「年譜」では明治三一年の項に「東京ニ移リ留岡幸助ト共ニ基督教新聞ノ編輯ニ従事ス」と記されているのみで、東
- 上の年月日は定かではない(注(6)参照)。恐らくこの時期に同志社で森田久万人の指導により比較宗教研究に専念していたと思われる。
  - (6) 『基督教新聞』第八二四号(明治三三年六月二日発行)。
  - (7) 同志社大学人文科学研究所編『留岡幸助著作集』第四卷(昭和五五年、同朋舎)一三〇ページ。
  - (8) 当時八濱のペンネームは主に「八濱掬泉」であるが、『基督教新聞』では外に「きくせん」、「掬泉子」、「八濱提披」、「八濱居子」等がある。
  - (9) 「年譜」では『福音叢誌』の編輯を「米国宣教師グライン」と共に為したと記されているがそれについては確かめていない。
  - (10) この著には八濱の論文の外、「宗教の分類」(岸本能武太)、「中興の民間信仰」(姉崎正治)、「アイヌの迷信」(バチエラー)、「福井の迷信」(永井一之助)等の論文が収載されている。(国会図書館所蔵)。

(11) 『迷信の日本』(明治三二年、警酩社書店) 一一二ページ。

(12) 同右、四ページ。

(13) 『福音叢誌』第一号(明治二九年六月二〇日発行)。

(14) 「年譜」による。八濱とて(大正七年死亡)との間には四男一女の五人の子供が生まれたが内二人は幼時に死亡した。

(15) 例えば明治三六年五月一日に東京教役者相談会が開かれ、ペンテコスト博士の着京後の運動方法につき会議の結果八濱は植村正久、本多庸一らと共にその実行委員になつてゐる。『基督教新聞』第一〇三〇号(明治三六年五月二二日発行)。

(16) 『洛陽教会五十年略史』(昭和一五年、洛陽教会) 六ページ。因に八濱が東京を離れるにあつて、明治三六年一月二〇日、小崎弘道、田川大吉郎、今泉真幸の三氏の發起にて彼の送別会が持たれた。『基督教世界』第一〇五二号(明治三六年一〇月二二日発行)。そして同紙次号には、同月二四日東京青年会館で八濱が「基督教的人生観」という「名浅りの講演」をしたことが報じられている。

(17) 『基督教世界』第一〇五七号(明治三六年一月二六日発行)。

(18) 同志社大学文学部牧野文庫所蔵になる、表紙に「記事京都奉公十字会」という和綴の資料による。

(19) 役員は以下のとおりである。

会長	牧野 虎次	人羅 忠遊
幹事	青木 仲英	荒木虎之助
会計	岩永 英作	橋 南 浩
評議員	西尾幸太郎	村田松之助
	曾 根 精	佐々木国之助
	石黒猛次郎	八濱徳三郎
	鷗崎庚午郎	鷲 尾 健治
	久保井翠桐	作 間 楯 斎
	油谷安次郎	

(牧野文庫所蔵資料)

(20) 『基督教世界』第一一六一号(明治三八年一月三〇日発行)。

(21) 因に『日本組合教会便覧』によれば、明治三七年から四〇年迄の洛陽教会の受洗人員は二二人(三七年)、五四人(三八年)、二〇人(三九年)、一七人(四〇年)である。

(22) 『洛陽教会五十年略史』七ページ。

(23) 共励会については勝部武雄論『共励会の回顧』(昭和一七年、基督教青年共励会連盟)を主に参照した。

(24) 八濱家には表紙に「自明治四十一年至四十二年共励会雑誌活世界主事時代 宗教通俗文章 八濱徳三郎」と書かれた冊子があり、それには論文や随筆等がとじられている。因にこの中より八濱の署名あるもののみを記しておく。( ) 内

はコラムである。「靈魂不滅」(福音入門)、「神の存在」(福音入門)、「基督の神性」(福音入門)、「祈禱の感応」(福音入門)、「主の祈禱」(研究)、「聖書研究の要件」(9)、「基督の事実」(説苑)、「基督の基督教」(説苑)。これらは『活世界』に発表されたものと思われるが筆者は該雑誌については未見なので発刊年月日やその他の論文については不明の現況にある。

(25) この著の初めに星野光多による「紹介の辞」が掲載されており、その中に「君は天性平民的人故に其文字思想、通俗にして而かも要領に当る。君が本書に於いて、基督の比喩を解するに、例を多く我國の事跡に索めたるが如きは、他人に及ばざる所なるべし。」と説明されている。

又、八濱が近く「耶蘇の山上訓」という著書を発刊する旨の事が書かれているが、恐らく未刊になったものと思われる。八濱家には「山上説教 基督の道話」という長い草稿が残されているが、恐らくそれが「耶蘇の山上訓」に当るものと考えられる。

(26) 『基督教世界』第一三二四号(明治四一年二月五日発行)。

(27) 因に活田教会の明治四一年度の教会員数は男五七人、女六一人である(『明治四一年日本組合教会便覧』)。

(28) 『基督教世界』第一三九九号(明治四三年六月三〇日発行)。

(29) 「年譜」には、明治四二年の項に「職業通信社、十字屋等ノ社会施設ヲ開始シ失業者ノ就職斡旋並ニ授産事業ニ着手ス」と記されている。因に『基督教世界』第一三六九号(明治四二年二月二日発行)には「今回八濱牧師は『弱者の友たらんがため無報酬を以て民事、商事、刑事、人事其他世務一切の相談に応ず』との看板を掲げ即ち独力を以て世務相談所を開始せり。既に牧師の尽力に依りて一人の刑事被告人過日放免せられたり」とあり、ここでは世務相談所という名称が使われている。

(30) 『総同盟五十年史』第一卷(昭和三九年)に収載されている(八九七—九四〇ページ)。

(31) この会には小河滋次郎、鈴木文治、留岡幸助、生江孝之、原胤昭等が参画しており、八濱が加わっていたことの確証はないが、その可能性は充分あるといつてよい。

(32) 例えば、生江は第一回の細民調査につき、「即ち明治四十四年六月調査に着手其の第一回は主として東京市下谷区に於ける約三千戸、一萬五千余人の細民に対する戸口調査を行ひ、且つ職上の生活状態、木賃宿、貸長屋、職業紹介の状況、又は細民の金融機関等に就き調査を遂げたのである。」と述べている。『人道』第一一五号(大正三年二月一日発行)。

(33) 留岡と細民調査の拘わりについては、留岡幸助日記編集委員会編『留岡幸助日記』第三卷(昭和五四年、矯正協会)

で多くを知ることができる。

(34) 津田真澄『日本の都市下層社会』（昭和四七年、ミネルヴァ書房）七四ページ参照。

(35) 内務省社会局編『細民調査統計表』（大正二十一年）所収。

(36) 八濱「大阪に於ける公益職業紹介事業の回顧」、『社会事業研究』二二一—二二〇（昭和一〇年一〇月一日発行）参照。

(37) 青木庄蔵『回顧七十五年』（昭和二年、青木匠済財団）二四ページ。

(38) 『財団法人大阪職業紹介所貳拾周年報』（昭和七年、大阪職業紹介所）三一—三三ページ。

(39) 青木は八濱につき次のように回顧している。

「其後留岡幸助氏の紹介によって常任指導者として、八濱徳三郎氏を迎へることとなり、取敢ず同氏の来阪を求めました。氏は暫時私共と起居を共にしつゝ、この事業に関する諸般の手續や手配等萬般の準備を進められ、その結果いよく同氏は家族をまとめて東京を引揚げて来阪さるゝことになり正式に同氏を主事として財団法人大阪職業紹介所を設立いたしましたのであります。そして氏に対しては月々の報酬謝礼として、差当り月金五十円を差上げ、この事業に尽力していたゞくことになつたのであります。」（青木『回顧七十年』二七ページ）。

(40) 『財団法人大阪職業紹介所貳拾周年報』一ページ。

(41) 『大阪朝日新聞』（明治四五年六月六日発行）には設立

当初の様子が詳細に記されている。「大阪職業紹介所は今宮の元憲兵所跡を改築して五日から開業した。表に『男女職業無料紹介』と大書した看板を掲げ男子部女子部とを左右に別けてある、入ると受付で普通の紹介屋の店を小清洒にした体裁である、此處に番頭格が居て原籍住所姓名年令履歴配偶者の有無旧雇主の職業希望の職業給料保証人等を申込書に書入れて労働なれば十五銭、月給取は三十銭の保証金を預かる、是れは手数料でないから職業の有無に拘らず決定すれば返すので只素見連中の申込を避ける為である、それが済むとヤハリ男女別々に四疊半ばかりの控室に待つて順番に中央の事務所に入り主事八濱徳三郎氏が申込書を見て更に詳細に尋ねるのである。……（以下略）……」

(42) 『大正二年日本組合教会便覧』によれば、八濱は明治四四年一月に組合教会に退会届を提出している（同著、一八九ページ）。

(43) 『人道』第九八号（大正二年六月一五日発行）。

(44) 『人道』第八七号（明治四五年七月一五日発行）。

(45) 『救済研究』二二二（大正三年二月二五日発行）。

(46) 『人道』第八七号（明治四五年七月一五日発行）。

△付記▽ 八濱徳三郎についての資料並に御教示を戴いた八濱和氏に感謝の意を表します。